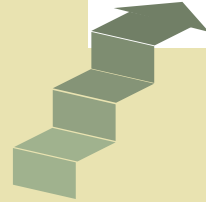


# 今日も高崎を機関車が走る

## 人気のデゴイチ C61



写真提供 / JR 東日本高崎支社



# 森繁久彌が機関士を演じた機関車のまち

### ●D51とC61の息づかいを体感

週末になると、高崎のまちなかに蒸気機関車の汽笛が聞こえてくる。長くむせぶその音は、旅立ちへの決意のようでもあり、惜別の哀愁を湛えているようでもあり、いつか見た白黒映画のワンシーンを記憶によみがえらせる。

時代とともに機関車の姿が日常の中から消えて久しいが、高崎駅では、週末の土日曜日や行楽日ごとに、機関車が運行されている。鉄道の本線を走る現役の機関車は全国でも数少なく、機関車の保有、運行日数ともに高崎は全国でも屈指だ。驚くことに高崎にはD51とC61の2両があり、高崎・水戸間と高崎・横川間を臨時列車として走っている。蒸気機関車の運行に欠かせないのが、ターミナル駅で方向を変える転車台（ターンテーブル）。高崎機関区と水上駅にそれぞれ奇跡的に残っていた。水上駅では、今でも蒸気機関車の方向を変える転車台作業を見学できる。

遠い汽笛に誘われ、旅愁の世界を夢見ながら高崎駅に行き、実際に機関車を間近にしてみると、その迫力に圧倒される。約80tの重量感ある黒い軀体

のフォルムは、鐵くろがねの生き物のようであり、吹き出す蒸気と汽笛の音圧に体が震える。大人の背丈ほどもある大きな動輪の力強い駆動に目を奪われ、その姿は美しく、人間の手が作り得た動力の最高傑作とさえ思えてくる。まさしく高崎で機関車は生きていたのだ。

### ●高崎機関区を描いた映画「喜劇各駅停車」

機関車がまだ現役で走っていた頃、高崎機関区には、寺山源吉という頑固一徹で気難しい熟練機関士と、優柔不断な丸山咲平という機関助士がいた。昭和40年に公開された映画『喜劇各駅停車』の中での話である。

この物語は、定年退職を控えて、なおも引退を拒む機関士源吉と、運悪くその助手を命じられた咲平を軸に動き出す。二人はぶつかりあいながらも心を開き、お互いに惹かれ合っていく。源吉を森繁久彌、咲平を三木のり平が演じ、喜劇駅前シリーズの井上和男監督が笑いあり涙ありの人情ドラマに仕上げた。

明治17年（1884）に上野・高崎間が開通して以来、高崎には天皇陛下が何度も「お召列車」で訪問されているが、寸分のくるいもなく、決められた位置にお召列車をピタッと停止さ

せるなど、高崎機関区の機関士は卓越した運転技術を持っていたという。源吉も、その優れた機関士の一人であったのだろう。

### ●汽笛の音が胸に沁みる

この映画の原作は、元高崎機関区の機関士で俳誌「あさを」を主宰した清水夢人の『機関士ナポレオンの退職』で、第50回芥川賞候補となった。田辺聖子に1票差で敗れて芥川賞は逃したが、NHKラジオドラマ、テレビドラマ、映画と立て続けに作品化された。

この映画で主人公源吉の機関士魂にほれ込んだ森繁は、3年後に明治座の舞台で再び源吉を演じている。機関士として37年間の勤めを終えた源吉は、機関車を格納庫に入れ、長い長い汽笛を鳴らす。その音は、源吉との別れを惜しむ機関車の嗚咽のように響き、演じる森繁のほおに涙が光った。

映画のロケを終えた森繁は機関士の仕事に感動し、高崎機関区に直筆の長編詩を贈った。その詩は「激しい振動と／横ゆれの中で／襲い来る睡魔と闘いながら／俺は走っている」と書き出し、「おい長笛一パッド」と結ばれている。

おやつ、機関車の汽笛が、高崎駅から聞こえてくる。

